

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520316

研究課題名（和文） カシュカイ語の言語構造についての記述的・理論的研究

研究課題名（英文） Descriptive and theoretical investigation of the structure of Kashkay

研究代表者

栗林 裕（KURIBAYASHI YUU）

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：30243447

研究成果の概要：

カシュカイ語はトルコ語と同じチュルク語南西グループに属しているながら、特異な統語法を持つ言語である。統語法のみ近隣言語であるペルシア語から借用し、語彙はチュルク語系のものを用いるような統語的言語変化はチュルク語全体の中でも少数派である。非トルコ語研究者にとっても興味深いカシュカイ語の言語資料を広くアクセス可能な形で提示し、知識の共有を進めていくことで理論的研究と記述的研究の連携を図ることを目的として3年間の研究成果を著書としてまとめた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	600,000	3,700,000

研究分野：言語学・チュルク諸語

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：カシュカイ語、チュルク語、言語接触、トルコ語、ペルシア語、統語法、国際情報交換、イラン：トルコ：フランス：スウェーデン

1. 研究開始当初の背景

イランの少数言語であるカシュカイ語は系統的にはチュルク語南西グループに属する。カシュカイ族の話者数は、試算では約14万人から50万人といわれており、イランの公用語であるペルシア語との二言語併用を行って

る。1970年代初頭まではイランの他のトルコ系民族の諸言語と同様に統語法上の際立った変化はなかったが、近年行なわれた調査では若い世代を中心に、異系統の言語であるペルシア語の統語法および語彙からの著しい影響を受けた構造に変化しつつあることがわかつ

てきた。本研究はカシュカイ語の構造変化の状況を明らかにすることを目的とする。またトルコ語のみに依存してきた理論的研究に対して考察すべきデータを広げる必要性を提案する。

2. 研究の目的

本研究の具体的な目的は以下の通りである。

- (1) カシュカイ語の音声や文法を含む体系的な言語記述
- (2) 統語的言語変容の解明 -どのような項目がどのような要因により変容するか-
- (3) 言語理論に対する新しい言語データの提供 -特に自由語順について-
- (4) カシュカイ語の将来への展望
- (5) 研究成果の迅速な公開と社会的還元

3. 研究の方法

調査項目は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所作成の基礎語彙集に主に基づきながら、必要に応じてイスラム文化圏に適したものに修正しつつ利用する。音声はDATレコーダーを用いデジタルデータ化して、保存する。ペルシア人と比較するとカシュカイ族の生活様式は遊牧民としてのさまざまな影響が認められる。言語資料の記述だけでなく、文化的な側面も映像資料として保存して、インターネット等で公開していく。

4. 研究成果

- (1) 音声資料を分析し、ペルシア語やトルコ語と対照させながら基礎語彙にみられる音韻変化や形態変化の実態の記述を行った。
- (2) 音声資料をデジタル化して容易にアクセスできるよう保存した。
- (3) 国内において関連する文献資料を収集し、特に地理的・文化的に密接な関係にあるイラン・アゼルバイジャン語からの音韻

的および文法的影響について考察を行った。

- (4) 理論的な側面から、チュルク語諸方言全体の中での位置付けを行うために統語法調査について方法論的な提案を行った。
- (5) 統語構造の理論的分析のために自由語順に深い関わりがある項目について重点的に調査を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1. Kuribayashi, Yuu. Contact induced changes in southwestern Turkic -emergence of analytic strategy for modals-. Proceedings of the 14th International Conference on Turkish Linguistics. Ankara University. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag (Forthcoming) 査読有
2. 栗林裕 「カシュカイ語の基礎語彙」 Kubo, T., Hayasi, T. and Fujishiro, S. (eds.) 『タイトル未定』 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Vol. 15. 九州大学 印刷中 査読無
3. Kuribayashi, Yuu. Turkish causative and semantic ambiguity. Kurebito, T (ed.) Ambiguity of Morphological and Syntactic Analyses. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. Tokyo University of Foreign Studies. 15-26. 2008 査読無
4. 栗林裕 「トルコ語の複合動詞と文法化」 『アジア・アフリカの言語と言語学1』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 25-44. 2006 査読有
5. Kuribayashi, Yuu. Syntactic

borrowings of Azerbaijani and Qashqay in Iran. Yagcioglu, S. and A. Deger (eds.) *Advances in Turkish Linguistics*.

Dokuz Eylul Yayinlari. Izmir; Turkey. 669-679. 2006 査読有

[学会発表] (計6件)

1. 栗林裕 「カシュカイ語の統語的コピーについて」 チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究 年度末研究会 平成21年2月14日 九州大学
2. Kuribayashi, Yuu. Topicalization and Relativization in Turkic: a view from Japanese. Turkology Seminar 28 January 2009, Uppsala, Sweden, Uppsala University
3. Kuribayashi, Yuu. Syntactic copying in Kashkay. Turkology Seminar. 15 October 2008, Uppsala, Sweden, Uppsala University
4. Kuribayashi, Yuu. Contact induced changes in southwestern Turkic -emergence of analytic strategy for modals-. The 14th International Conference on Turkish Linguistics 6-8 August 2008, Antalya, Turkey, Ankara University
5. 栗林裕 「チュルク語南西グループにおける接触による言語変容について」 チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究 2007年度研究報告会 平成20年2月16日 九州大学
6. 栗林裕 「トルコ語の複合動詞について」 チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究 2006年度研究報告会 平成19年2月17日 九州大学

[図書] (計1件)

1. 栗林裕 九州大学 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Vol.16. 『チュルク語南西グループの構造と記述』2009 (ix+256 p.)

[その他]
ホームページ

<http://www.cc.okayama-u.ac.jp/~kuri/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栗林 裕 (KURIBAYASHI YUU)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：30243447